

■『俊頼髓脳』

歌の、八つの病の中に、後悔の病といふ病あり。歌、すみやかに詠み出だし、人にも語り、書いても出だして後に、よき言葉、節を思ひ寄りて、かく言はでなど思ひて、悔い妬がるをいふなり。さればなほ、歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。いまだ、昔より、とく詠めるにかしこきことなし。されば、貫之などは、歌一つを、十日二十日などにこそ詠みけれ。しかはあれど、折に従ひ、事にぞよるべき。

大江山いくのの里の遠ければふみもまだみず天の橋立

これは、小式部内侍といへる人の歌なり。事の起こりは、小式部内侍は、和泉式部が娘なり。親の式部が、保昌が妻にて、丹後に下りたりけるほどに、都に歌合のありけるに、小式部内侍、歌詠みにとられて詠みけるほど、四条中納言定頼といへるは、四条大納言公任の子なり。その人の、戯れて、小式部内侍のありけるに、「丹後へ遣はしけむ人は、帰りまうで来にけむや。いかに心もとなく思すらむ。」と、妬がらせむと申しかけて、立ちければ、内侍、御簾よりなから出でて、わづかに直衣の袖をひかへて、この歌を詠みかければ、いかにかかるやうはあるとて、つい居て、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、え思ひ得ざりければ、引き張り逃げにけり。これを思へば、心とく詠めるもめでたし。

口語訳

和歌の、八つの病の中に、後悔の病という病がある。歌を、早々と詠み出して、人にも語ったり、書いて送ったりした後に、よりよい言葉や、趣向を思いついて、このように詠まないで（残念だった）などと思つて、悔しがることをいうのである。そうであるからやはり、歌を詠むような時には、急いではならないというのがよい態度である。今もなお、昔から、早く詠んだことによつてすぐれた結果はない。だから、紀貫之などは、歌一首を、十日も二十日もかけて詠んだのだ。そうではあるけれど、その折々に従い、事柄によるべきである。

大江山を越えて行く生野の里が遠いので、まだ天の橋立の地を踏んでみたこともありませんし、母からの手紙も見えていません。

これは、小式部内侍といった人の歌である。事の始まりは（こうである）、小式部内侍は、和泉式部の娘である。親の和泉式部が、藤原保昌の妻として、丹後の国に下っていた頃に、都で歌合があったときに、小式部内侍が、歌人として

選ばれて（和歌を）詠むことになった時に、四条中納言藤原定頼といったのは、四条大納言藤原公任の子である。その人が、ふざけて、小式部内侍が（局に）いたときに、「丹後へおやりになったとかいう人は、帰って参上してきたか。（あなたは）今、どんなに待ち遠しくお思いになっているだろうか。」と、悔しがらせようと申し上げて、通り過ぎたので、小式部内侍は、御簾から半分ほど（身を）乗り出して、ほんの軽く直衣の袖を捉えて、この歌を詠みかけたところ、（定頼は）どうしてこのようなことがあるのか、いや、あるはずがないと思って、そのまま（その場に）留まって、この歌の返歌をしようとして、しばらくは思案していたけれど、思いつくことができなかったので、（直衣の袖を）引っ張って逃げてしまった。このことを思うと、素早く発想して詠んだことも立派である。

■『宇治拾遺物語』第八十一話

大二条殿に小式部内侍歌よみかけ奉ること

これも今は昔、大二条殿、小式部内侍おぼしけるが、絶え間がちになりけるころ、例ならぬことおはしまして、久しうなりてよろしくなり給ひて、上東門院へ参らせ給ひたるに、小式部、台盤所にゐたりけるに、出でさせ給ふとて、「死なんとせしは。など問はざりしぞ。」と仰せられて過ぎ給ひけるに、御直衣の裾をひきとどめつつ申しけり。

死ぬばかり嘆きにこそは嘆きしかいきて問ふべき身にしあらねば

堪えずおぼしけるにや、かき抱きて局へおはしまして、寝させ給ひにけり。

口語訳

これも今となつては昔のことだが、大二条殿（藤原教通）は、小式部内侍を愛していられつやつたが、通うことが途絶えがちになった頃、病氣になられて、しばらくたつてから快復なさつて、上東門院（彰子）へ参上なさつた時に、小式部が台盤所にいたのだが、（大二条殿が）お帰りになろうとして、「（私は病気で）死にそうになったのだよ。どうして見舞いに訪ねて来なかつたのか。」とおつしやつて通り過ぎなさつた時に、（小式部は）御直衣の裾を引き止めながら申し上げた。

私は死ぬほどひたすら嘆いておりました。生きてあなたのもとに行つてお見舞いできる身の上ではありませんので。

（大ニ条殿はこの歌を聞いて）堪えられないほどいとしくお思ひになったの
であらうか、（小式部を）抱いて部屋にお入りになって、共寝をなさった。